

現代スウェーデン政党政治史論（四）

——第一次選挙法改正と政界再編成——

岡 沢 憲 芙

《目 次》

第一部 政党政治揺籃期（一九三二年迄）

第一期 二院制議会の誕生・議会内政党の時代（一八九〇年代前半迄）

——以上一六号——

第二期 普選闘争・大衆組織政党の登場（一九二〇年代迄）

▽ 工業化の進展

▽ 労働組合の発生

▽ 社民党の誕生

▽ 普選選挙権闘争

▽ 政党政治の再編と政治勢力の変動

。一九一一年第二院選挙

。Staaff（第二次）内閣

。Hammar skjöld 内閣

。一九一四年春選挙（第二院）

。一九一四年通常選挙（第二院）

——以上本号——

。第一次世界大戦と政党政治

。一九一七年選挙

。Elder 内閣

。第二次選挙法改正

。選挙法改正と議会の変容

第三期 少数党内閣時代・議院内閣制の完成（一九三二年迄）

第二期 政党政治発展期

第四期 社民労働党の時代

▽政党政治の再編と政治勢力の変動

一九〇七〜一九〇九年の選挙法改正は近代的政党制の発生基盤を整えた。まさに発展しようとしていたのは保守主義、自主主義、社会民主主義の三政治勢力間競合であった。

●一九一一年第二院選挙

新しい選挙法の下で行なわれた最初の選挙はスウェーデンの選挙政治にこれまでとは違った性格を与えた。全人口に占める有権者の比率が選挙法改正前の九・五パーセントから一九パーセントへと一気に倍増したために、また、小選挙区制から比例代表制に切り換えられて選挙区の規模が大幅に拡大したために、キャンペーン・スタイルは大きく変化した。局地的・限定的競合から全国的・全面的競合の時代を迎えて、これまでになく活発な選挙キャンペーンが展開された。

普選闘争の旗手を務めた自由主義陣営は既に臨戦体制を整えていた。既に述べたように自由主義諸派は結集して一九〇〇年に「自由統一党」を作ったが、その後着実に勢力を拡大し、一〇〇名の議員を集めることに成功していた。一九〇二年には Karl Staaff の指導の下で、それまで分散して存在していた自由主義諸派の地方結社が一つの全国組織に統合された。ここで出来た大衆組織は普選闘争を展開する上で有効な武器になったし、党が選挙権拡大という挑戦に直面した時も、そのおかげで、うまく対応できた。しかし、問題点がまったくなかったわけではない。選挙法改正の直接的結果として、党内バランスに微妙な変化が生じたからである。具体的には、選挙権拡大によって自由党内の地方的要素が強化されたからである。選挙権論争を指導したのは Karl Staaff や他の都市派政治家であり、その間地方派はより穏健な打開策を追求・選択していた。普選問題に結着を付けた保守の Lindman 首相が、力による威嚇策を採用した自由—社民連合に直面して苦悩していた時、穏健な打開案を提出して、結果として Lindman 首相を救ったのは、地方派のリーダーである Daniel Persson i Tallberg であった。既に述べたように、Persson 一派が一九〇七年に党を捨て Lindman を支持したために自由—社民連合の一角が崩れ、普選法案が成立したのである。この都市派自由党と農村派自由党の対立は、後者のリーダーがその背信行為を理由に、院内執行委員会のポストを剝奪された時、修復不可能な感を与えた。しかし、党は素早くこの党内不和を埋め去った。Persson は僅か一年後に、もと通りにポストを回復した。この頃の自由統一党は、巨大な大衆組織を背景に上昇気流に乗っていたので、一種の自信に溢れていたようである。例えば、一九〇九年に、保守の Lindman が率いる内閣の閣僚であった Peterson i Pahoda が自由統一党への入党を希望した時も、Peterson が閣僚を辞任するとすぐに執行部入りを許した。党首 Karl Staaff が党内融和と党勢拡大に最善を尽くす人物であったこともこうした党行動がとられた原因の一つ

であったように思われる (D. Rustow, 1955)。しかし、党としては現に逸脱分子を出したという事実を消し去ることはできなかった。無原則の柔軟性だけでは党運営が不可能である時代が到来したことが判った。都市派對農村派對立を念頭に置き両者のバランスを保持することが拳党体制の確立に不可欠であることを知った。しかも、選挙法改正に伴って地方的要素が強化されることになり、従来のように都市派が党内ヘゲモニーを独占し続けることが不可能であるような情勢がまさに生まれようとしていたのである。バランスの確保と党規律の強化、これが一九一一年選挙に臨んで自由統一党が採用した戦術の基本的な狙いであった。いわゆる〈三項目の祈願 3 besvärjelsepunkter〉がこれを雄弁に物語っている。

選挙に当って自由党の全国組織は、「すべての自由党候補者が受け入れなければならない」〈三項目の祈願〉を作成した (P-E Back, 1972)。三項目とは (i) 第二院中心の議会政治 (真の議院内閣制)、(ii) 国防負担の軽減 (兵役義務の短縮、国防費削減)、(iii) 全面的禁酒の検討と酒類製造・販売の地方レベルでの拒否権、であった。「すべての自由党候補はこの三つの改革要求を確かに実現するために、断固、無条件に共同で邁進する覚悟のあることを宣言しなければならぬ」と考えられた。この三祈願は二つの性格を持っている。先ず第一に、拡散しがちな党内世論に枠をはめ、とりわけ都市派と農村派の要求のバランスをとろうとしていること。祈願 (i) は長年にわたって都市急進派の満たされざる要求であった。(ii)、(iii) は、逆に、平和主義と地方支持者の禁酒主義を反映していた。党のこのバランス感覚はそれなりに見事であった。当時の二グループ (都市派、農村派) 間の境界線は曖昧であったし、その相違は主に力点の置き場所の相違だけであったからである。実際のところ、両者の主張を加算するだけの〈妥協策〉で当面の選挙に処できたのである。(しかし、その後の政治状況の変化は、国防問題に関する小さな意見対立と、禁酒問題に関する

克服できぬ意見分裂を生むことになるのである）（D. Rustow, 1955）。第二に、三祈願には近代的大衆組織政党に欠かせない〈厳格な党規律〉の性格が備わっている。候補者に党への信仰告白を要求し、忠誠心を表明した者に限って統一政党名を使用させることになったのである。一九一五年に死ぬまで党首職にあった Karl Staaff は選挙権拡大の政治的影響を充分認識していたようである。

一方、保守陣営は、時局認識の上で、かなり遅れをとっていた。一般に、保守系政治家は、激烈な選挙戦を軽蔑して、誇り高き紳士の尊厳にもとるものと考える傾向があった。Lundeborg のように「左は良く組織されているのに、右は高慢で怠惰である」と下平をもらす人物もいたが、統一組織の確立には、結局のところ、成功しなかった（D. Rustow, 1955）。

選挙法改正の時点で、保守主義は四つの政治勢力に分裂していた。

- (i) 〈保護貿易党 Det protektionistiska partiet, 1888～1909〉
- (ii) 〈第一院穩健党 FK : s moderata parti, 1905～1911〉——一九〇五年に、保護貿易党の一部と〈第一院少数派党 Minoritetspartiet i FK, 1888～1904〉が合同して結党
- (iii) 〈地方党 Lantmannapartiet, 1895～1911〉
- (iv) 〈全国進歩党 Nationella framstegspartiet, 1906～1911〉——一九〇六年に、地方党の一部と〈穩健改革グループ De moderata reformvänners grupp, 1903～1905〉が合同して結党。

一九〇四年に、この四つの議会内保守グループの選挙戦を調整するための組織として、普通有権者同盟が作られていたが、一九一一年選挙でも、この組織が主たる武器となっていた。選挙法改正の結果、南部および中部スウェーデ

ンの農村地域で新しく誕生した有権者は圧倒的に保守支持であったが、統合された大衆組織政党への脱皮を怠っていたために、選挙では議席を減らすであろうと予想された。

当初から、大衆組織政党として発足した社民党にとっては、選挙法改正に続く一九一一年選挙こそ、党躍進の出発点と考えられていた。この頃には、党は工業労働者、農業労働者、小作人、小農、および増大する中産階級知識人をも含む大衆運動となっていたが、問題点がないわけではなかった。党の幼年期にまで溯ることができる内部抗争に悩まされていたからである。名党首 Branting は自由主義、民主主義、議会主義、平和主義の諸原理を実現することにそのエネルギーを集中させていた。そして、普選実現を最優先させていた。選挙法改正後、増大した新しい黨員や支持者の多くは、曖昧な革命的スローガンを現実翻訳することよりも、より具体的な政治的・社会的・経済的改革に関心を持っていた。かくして、圧倒的多数の社民黨員は Branting を支持していたけれども、その一方で、以前の革命理論を唱え続ける黨員も少数ながらいいた。秘密陰謀組織の創設を主張した Palm、社民党青年クラブに支持者を持ち無差別暗殺キャンペーン、暴力革命論を主張した Hinke Bergegren の流れを汲む黨員であった。一九〇八年に Bergegren が党から排除されると、急進派の声は公式には低くなったけれども、新しく党に加入した青年グループの中には、党執行部の遙か左を指向していると告白する者がいた。彼らは、軍隊の民主化よりもむしろ軍隊の廃止を要求した。議会内活動では漸進的改革の道よりも急進的なプロパガンダの綱領を求めた。そして、自由主義との提携に鋭い批判の眼を向けていた (D. Rustow, 1995)。こうしたグループはいずれ党分裂の可能性をも孕んだ派閥抗争の核になると予想された。

選挙権拡大は、どの角度から見ても、社民党に利すると考えられていたので、選挙法改正直後から、著名人の中か

ら入党希望者が続出した。急進派自由党员と無党派の知識人がその中心であった。前者の例としては、後に左派社会党のリーダーになった Carl Lindhagen や、入党すると直ぐに Branting の最も信頼する補佐役になった Baron Erik Palmstierna がいた。また、後者の例としては、有名な社会学者である Gustaf Steffen (彼は一九一五年に脱党する)、精神病理学者 Alfred Petren がいた。

選挙は一八八七年の関税論争以来の熱狂の中で行なわれた。ただし、投票率は想像されていた程伸びず、五七パーセントにとどまった。それでも、実数から言えば、これ程多くのスウェーデン人が政治問題に参加し、意思決定の機会に恵まれたことはかつてないことであつた (I. Andersson, 1956)。自由統一党は一〇二議席を獲得し、現状維持に成功した。保守陣営 (右党) は六四議席にとどまり、それまで蒙つたことのない程の打撃を受けた。社民党に右党から移つた議席は二九であつた。〈地滑り Jordskred〉は予想されていなかったことではなかったが、これ程大規模なものになるとは考えられていなかった (S. Oakley, 1969)。社民党は右党から二九議席奪い六四議席となつた。社民党の躍進は当初から確実視されていたので驚ろくにあたらないが、保守勢力に並ぶ議席数を獲得することによつて、政権を担当する日が遠くないことをはっきりと証明することになった。

選挙結果に衝撃を受けた保守陣営は体制建て直しの必要を痛感するようになった。一九一二年に普通有権者同盟の議長に就任した Arvid Lindman が再建にあたることになった。彼は、選挙結果を分析して、今後も予想される党勢後退を阻止し、中心的な政治勢力としての地位を保持し続けるためには、保守合同しかないと考えた。実際のところ、選挙結果を見る限り保守には各議院で二つ (計四つ) の政党を維持していく余裕など到底ないように思われた。一九一二年、第二院の〈地方党〉と〈全国進歩党〉が合同して〈地方居住者および市民党 Lantmannan-och borgar-

repartiet)が誕生した。第二院においても、同じ年に、〈第一院統一右党 Det förenade högerpartiet i FK〉(一九〇九年に分裂した保護貿易党の多数派が翌一九一〇年に作った党)と〈第一院穩健党〉が合同して、〈第一院全国党 FK: s nationella parti, 1912~1934〉が生まれた。〈地方居住者および市民党〉と〈第一院穩健党〉は多くの点で単一政党の支部組織として行動した。重大な政策問題については合同幹部会を開いて協議した。また、めったに起こることではなかったが、片方の議院で議席を持っていた保守議員が、もう一方の議院に選挙を経て鞍替えする時には、自動的にその党派に所属した。さらに、両党とも、その選挙戦を普通有権者同盟に委託した。一般に、この三グループ、つまり、〈地方居住者および市民党〉、〈第一院全国党〉、〈普通有権者同盟〉を総称して〈右党〉ないしは〈保守政党〉と呼ぶ(D. Rustow, 1955)。

ただ、ここで注意しなければならない点は、よしんば同一政党の支部として行動することがあったとしても、二つの政党に分裂していたという事実を消し去れるものではないということである。社会民主主義勢力、自由主義勢力とは対照的に、保守陣営は両院共通の単一政党に結集することに失敗したのである。この原因の多くは Arvid Lindman と Ernst Trygger の個人的対立に求められる。Lindman は一九一三年以後、〈地方居住者および市民党〉と全国組織のリーダーを務め、他のいかなる政治家にもまさって、保守運動の統一をシンボライズしていた。彼は改良主義を指向した保守主義で〈地方居住者および市民党〉を指導していた。一方、Trygger 教授は超保守主義で〈第一院全国党〉を指導していた。両者の個人的対立は非常に大きく、そのため、真の保守結集は彼らが生きている限り不可能であると思われた。(実際、真の保守合同が成ったのは二三年後のことであつた)。

●Staaf (第二次)内閣

一九一一年選挙以後、下院中心議会政治論の立場は以前にもまして強化された。一九〇七年に即位した国王 Gustaf V は、前王 Oscar II の前例（一九〇五年、最も嫌っていた第二院第一党の党首 Karl Staaff に組閣を命じるを得なかつた）に従って、第一党の党首である Karl staaff に政権担当を要請せざるを得なかつた。

社民党が政権参加を拒否したため（非公式の協力は約束）、Staaff は自由党员一〇名、無党派の官僚一人で、第二次内閣を組閣した。この内閣では、陸軍大臣、海軍大臣に文民が任命された。これは政治的伝統の一つとの重要な断絶を意味した。教育・教会相には Fridtjuf Berg が任命されたが、とりわけ興味深いことは、保守のリーダーである Lindman と仲違いして、自由党に鞍替した Alfred Petersson i Påboda を Staaff が農相に任命したことである。Petersson i Påboda は「王の閣議に席を連ねた最初の農民 den förste bonden vid konungens rådsbord」と称されているが、彼は Karl Staaff と共に Christian Lundeborg 内閣（一九〇五年）に入閣した実績がある（S. Carlsson, Jerker Rosén, 1961）。

Karl Staaff は普選闘争で高揚した民主化の潮流を充分に認識していた。彼はこれまでの首相には見られなかつた強気の姿勢で国王に迫った。「第一院の解散」を組閣の条件として持ち出したのである。当然のことながら、国王 Gustaf V は、こうした例外的な突拍子もない行動に驚ろいた。想像だにしていなかつたからである。しかし、多くの国の場合と同様、民主化の歯車は一度回転し始めると逆転をせることは難しい。結局、国王は信頼する Lindman の助言を受け入れ、Staaff の要求に屈服したのである。その結果、第一院の政党配置図は大幅に変化した。堅塁を誇った保守陣営は一三三議席から三五・三パーセントも議席を減らし、一気に八六議席にまで大後退してしまつた。依然として単独で過半数を制しているとはいへ、一五〇議席のうち実に一三三議席（八八・七パーセント）を制して

〈保守の牙城〉にしていたことを考えれば、文字通り「民主化の余波をもろに受けた」と表現できよう。逆に、自由統一党と社民党は大幅に議席を増やした。前者は一五議席から五二議席へ、後者は二議席から一二議席へと躍進した。これによって、反保守勢力（自由統一党、社民党）は両院合同採決で過半数を確保できることになった。

Staatf 首相による対国王攻勢は、主に国防問題をめぐって展開された。首相は計画的・体系的な経費削減を盛込んだ国防プログラムを作成しようとしていた。Staatf はもともと国防費削減を望んでおり、これまでも軍部の要求を押え込む方針を貫いてきた。一九一一年、彼は次の四点から防衛問題を検討するよう指示した。(i)財政、(ii)陸・海軍間のバランス、(iii)節約措置、(iv)訓練期間。その主旨説明で、社会政策の拡充を期すためにはかなりの国費を投入する必要があると強調し、国防費削減に対する首相の決意を表明した。国防問題検討委員会には軍人を一人も指名せず、専ら自由主義者で補充した。Staatf 首相の最初の活動の一つは、前議会で承認されたFポート建造計画を延期することであった(D. Rüstow, 1955)。国王の失望とStaatf 首相への怒りは容易に想像できよう。王は閣議事録 statsrådsprotokollet への二度にわたる国防強化指令を通じて、首相のとった行動への不満・不平を表明した。しかし、国王の抵抗はこれまでであった。最終的には、黙認するしかなかった。ところが、国王が事前に、閣外にいる保守主義者や穏健派自由主義者に接近し、彼らの助言を求めていたことが発覚してしまった。正当な権限を与えられた首相 (Staatf を首相に任命したのは他ならぬ Gustaf V であった) を信頼せず、国王がこうした行動に出たことを知った首相は国王への怒りをかき立てた。相互不信感が両者の関係を支配した。

Fポート建造計画延期問題は議会内外で大きな論争を生んだ。議会内では、野党つまり保守党が与党の一角、つまり自由統一党の穏健派（彼らは《自由党国防の友》、《自由党国防論派》と呼ばれていた）を支持していた。そして、

モロッコ、バルカン半島、フィンランド、ロシアの動向を指摘し、その不吉な気配を論じ立てた。議会で内閣の行動が承認されると、論争の場は議会外に移った。そして、極めてユニークな国民運動が誘発されることになった（A. Stomberg, 1970）。

有名な冒険家である Sven Hedin が一九一二年に迫力のある文体でパンフレットを発行し、国防問題に対する国民の認識を覚び醒まし、安穩ならざる世界情勢を説明した。約一〇〇万部も発行されたこのパンフレットは議会内国防論者のいかなる説得よりも効果的であった。彼は読む者を驚かせずにはおかない非難と告発の口調で、ロシアの攻撃的で敵対的な政策を暴露した。スウェーデン人の安全保障観と無関心については、次のように書いている。「われわれはまるで、戦争というものを既に過ぎ去った蛮族の時代のありもしない迷信的な懐旧談でもするようなつもりで考えて生きている。確かに、わが国民は長きにわたって神だけを信じて生きてきた。われわれは手遅れにならぬ前に、確固たる武器を手に入れる必要がある」（A. Stomberg, 1970）。国防強化論者は Hedin の名声と人気を積極的に活用して、世論操作にエネルギーを投入した。国防論者にとっては、Hedinこそ敢て真実を語った不屈の愛国者であった。

国防強化宣伝が活発に展開されるようになると、当然のことながら、反宣伝も目立つようになった。社会主義陣営や急進派自由主義者は激烈な反国防強化宣伝を行なった。彼らにとって、Hedin は忘恩の徒であり、浅学非才の徒であり、なにかと言えば刀剣を振り回したがる狂信的・好戦的な愛国主義者であった（A. Stomberg, 1970）。知識人の中では、その生産性の高さに関心領域の広さの点で、他を圧していた多芸多才の作家 August Strindberg の行動が注目された。ペンによる体制批判と社会改革を標榜していた青年急進派作家グループ〈若きスウェーデン〉の中で

際立った地位を得ていた Strindberg は、一八七九年に『赤い部屋 *Röda rummet*』でデビューして以来、数多くの作品を残していた。一説によると、彼の作品をすべて読了するためには、コンスタントに一日八時間読書に充ててもまる二年間にかかるだろうと言われている (A. Stomberg, 1970)。彼は一九一二年に死んだが、その晩年に、いわゆるヘストリンドベルイの論争 Strindbergsfejden を展開した。主に、ヘ九〇年代の美学 nitiofalsestetiken、つまりヘ九〇年代のナショナリズム nitiofalsnationalismen を批判し、好戦的な国防強化論を激しく攻撃した。急進派は攻撃の一部を直接、国王にも向けた。民主化の流れの中で、国王の行った行動は明らかに権限を逸脱しているというのである。「君主国から共和国へ移行すべし」との要求も一九一一年以来、社民党のプログラムに認められるようになった。一九一三年には社民党青年運動の三人のメンバーが『強化された貧民收容所 *Det befästa fattighuset*』と題する反軍パンフレットを発行したが、党首 Branting は、国際政治状況、国内世論の動向を考慮して、それを承認しなかった (S. Carlsson, J. Rosen, 1961)。

ここで、ユニークな国民運動が発生した。いわゆる『武装ボート建造基金募集 *pansarbåtsinsamlingar*』運動である。一九一二年に始められたこの運動は、自発的な民間資金で F ボートを建造しようと呼びかける市民運動であった。これは国防強化論者から熱狂的に支持され、当初予想されていた以上に早く募金が流れ込んだ。僅か数カ月にして約一七〇〇万クローネ集まり、建造資金がこれだけで賄えることが判った (A. Stomberg, 1970)。政府はためらうことなくこの基金を受取った。一九一五年にはヘスウェーデンと命名された F ボートが進水した。

F ボート建造問題が一段落すると、国防論議の焦点はヘ歩兵の訓練期間 *infanteriets övningslid* へと移った。この問題についても与党の意見は分裂していた。国防問題検討委員会に席を並べていた自由統一党穏健派、つまり自

由党国防の友は保守主義者と共に徴兵の訓練期間を延ばすよう主張していた。一方、自由統一党の国防費削減論者は社民党と組んで現状維持か訓練期間の短縮を主張していた。党首 Staff は党内融合に努力した。彼は、掛け値なしの誠実さ、偉大なる豪胆さ、大衆の利益への比類なき献身を身上とする政治家であると称されているが (A. Stomberg, 1970) 他党に比べてはるかに多孔性の強い政党のリーダーとして、常に党内世論の調和に気を配らねばならなかった。一九一三年一月に行なったカールスクローナ演説 tal i Karlskrona で Staff 首相は分裂した陣営を一本化したと話した。原則的には、新しい沿岸防衛強化策と武装ボートの建造によって、陸軍も海軍も強化したいと考えていると述べた。彼はまた、訓練期間の延長も支持していると主張した。しかし、一九一一年の選挙公約とも関係してくるので、有権者が完全に入れ替ってしまうまでは、この問題は解決できないだろうと考えていた (S. Carlsson, J. Rosén, 1961)。「確固たる大衆の支持を基盤にしない限り、いかなる軍事体制も国防の手段としては有効たり得ない」と考えていた彼は、演説で、世論の動向を反映させたが、その中途半端な性格のために、かえって大きな困難に直面することになった。自由統一党の「国防の友」派は、慎重に準備された Staff 演説の中の、訓練期間問題の棚上げという点に反発した。一方、国防費削減派は、陸・海軍強化という点を批判し、首相は保守に屈服してしまつたとアジツた。とりわけ Staff 首相から入閣要請がなかったために個人的不満感を持っていた Daniel Persson i Tallberg の言葉は厳しかった。「首相は右に移動してしまつた、あの Hedén の迷言に屈してしまつたのぢやね」(S. Carlsson, J. Rosén, 1961)。

政府の国防プログラムを明らかにしたカールスクローナ演説の言わんとするところは、結局のところ、次回第二院選挙(一九一四年九月)まで問題を棚上げしようということであった。この演説は全国を席捲していた国防強化論に

火を付けた。《農民の行進 bondetåg》と呼ばれる大規模なデモが組織されることになった。これは、伝統的に国防強化論の強い地方の一つである Uppland の一農民が考えていた案で、この農民は Gustaf V の参加についても一九一三年一月頃から論じ始めていた。煮切らない Staff 首相の態度が、特に中部スウェーデンと南部スウェーデンで、《農民の行進》論を燃え上らせた。この運動は、短期間に数多くの賛同者を集めることに成功した。三〇〇〇人以上の農民が参加者として名を連ねた。それに加えて、四〇〇〇〇の農民と七〇〇〇〇の農民以外の市民が支持を表明した。既成政党が立入る余地はほとんどなかった。政治的にはほとんど無名の地主、農民、実業家が運動の核となっていた。保守のリーダーである Lindman にしても、当初は、慎重に見守るだけであった。大衆組織政党というよりは幹部政党の性格が強い保守政党にとっては、この種の運動は不得手であったのであろう。一九一四年二月六日、三〇〇〇〇の農民がストックホルムの王宮を目指して行進した。彼らが掲げた旗には「神とスウェーデン農民は王と母国のためにあり」と書き記されていた。行進の参加者は最後に王宮の中庭と宮殿前のスロープに集結した。国王は行進を受け入れた。姿を現わした Gustaf V に、陸・海軍の速やかな強化を訴えた。返答として、Gustaf V は有名な《中庭演説 borggårdstale》を行なうた。この演説の草稿は、学者である若き Karl XII と協力した Sven Hedin が書いたものである。華麗なるレトリックを駆使した、古い時代の典型的な愛国演説であった。母国スウェーデンに対して農民が示した愛を賞讃し、彼らの要求に対する共感を表明した後で、次のように述べた (S. Oakley, 1969)。

「確かに、この国には今は歩兵の訓練期間を規定する時ではないと考えている者がいる。だが、余はこうした者とは与しない。逆に、余は諸君と同じ考えを持っている。つまり、遅滞することなく今ただちに、国防問題を検討し、

決定すべきであると考えている。余としては、陸軍の効率を向上させ、軍備を整備せよとの要求を支持している。余の軍事専門家もそれが不可欠だと申し述べている。さらに、陸軍が重大な任務を果たすためには、余の海軍はただ単に維持されるだけでなく、正しく強化されねばならない」。

国王は〈余の陸軍 *min armé*〉〈余の海軍 *min flotta*〉という表現を積極的に使って、Staaffらの介入を牽制した。そして、この問題については妥協の余地がないことを強調して、《農民の行進》が国王に示した熱烈な支持に応えた。国王の行なった〈中庭演説〉は、ある意味で、Staaff首相に対する挑戦であった。事前協議が一切行なわれなかったからである。Staaffにとっては、政府が公表している政策に対する公然たる挑戦であり、政府の拒否であると映った。両者の関係はこの上なく悪化してしまった。Staaff首相は国王の行動をにがにがしく思っていた。Staaffの気持を理解して、背後から彼を支えたのは社民党であった。実際のところ、国王に対する敵意では、社民党の間の方がはるかに大きかった。Staaff自身は憤慨するだけだったが、社民党はBrantingの指導の下で、五〇〇〇人参加の《労働者の行進 *arbetaråg*》を組織し、Staaff首相をバックアップした。また第二院では、Brantingが〈中庭の演説〉を不当な行為であると非難した。さらに、議会外抗議集会を開いたのも社民党であった。一方、Gustaf Vにしても、Staaffほど不愉快な政治家はいないと考えていた。国王の眼からすれば、また、とりわけ女王の眼からすれば、Staaffは政治家としても人間としても到底一緒にやっっていけそうにない不快な人物に映った(S. Carlsson, J. Rosén, 1961)。Gustaf Vの行動を導いていたのは、大きな責任感、洞察力、正直さ、忠誠心、活力、堅固なる意志力であったと評価されている(A. Stomberg, 1970)。そして、その行動は常に、スウェーデン王家のモットー、つまり、「国民と共に祖国のために」という精神に合致していたと考えられている。だが、この時期に限

つては、助言者に恵まれていたとは言えないように思われる。国王の背後にいた、そして、国王が最も信頼していた政治家は、第一院保守党（第一院全国党）のリーダーである「Trygger」とそれに連なる超保守主義者だけであった。第二院保守党（地方居住者および市民党）のリーダーである Lindman や数多くの穏健な保守主義者は、慎重な行動をとるよう助言し、忍耐の政治を国王に求めていた。さらに、国防問題の解決と政府危機の処理について、国王が大きな希望を託し、また、託そうとしていた自由統一党穏健派（国防の友）となると、それ以上に慎重であった。彼らにとっては、いかに国防問題で意見が合っていないくとも、自らの党首と決定的に対立することは不可能であった。こう考えてくると、国王が《農民の行進》に感激し、彼らに友好的な態度をとったのも当然のことであるかもしれない。

完全に冷え切ってしまった国王と首相の関係には和解の余地はなかった。最後の局面を迎えた時も、両者は高姿勢を崩すことなく決裂してしまった。

Staff 首相は、〈中庭の演説〉は立憲君主制の先例と確立されたルールを無視する行為であると非難した。彼は、「今後は、国王が政治的声明を出す場合は、内閣に事前情報を与えるよう」に要求し、国王に約束を迫った。口答で提出されたこの要求に対して、国王はやはり口答で次のように応じた。「スウェーデン国民に自由に話しかける権利を放棄するつもりはない」。二つの憲法判断が激しく対立した今、政府危機は不可避となった。Staff 内閣は、抵抗の姿勢を示すため、総辞職した。Staff にしてみれば、時代の精神を無視した国王の回答には到底満足できなかったのである。

Staff 内閣の崩壊をどう評価すれば良いのであろうか。社民党と自由統一党急進派は、国王の行動の中に、一九

世紀初期の独裁体制の影を見てとった。Branting は、(中庭の演説)をスウェーデン国民が絶対主義への動向に抗して、闘い、獲得した遺産とも言える憲法上の安全弁と一致しない行動であると非難していた。彼の論理に従えば、国王の行為は絶対主義回復の試みであった。一方、保守陣営と自由統一党右派の多くは、憲法判断上の対立があるとは考えなかった。むしろ、彼らは、この問題を意図的に回避したのである。そして、国際情勢の緊迫化を指摘して、具体的問題の解決を強調する策に出た。Gustaf V にとっては、内閣の辞職は大きな問題ではなかった。どんな犠牲を払っても国防を強化することが君主の義務であると確信していたからである (D. Rustow, 1955)。彼の行動は、その意図はともかく、議院内閣制への潮流を拒否していたのである。

● Hammar skjöld 内閣

Staff 首相が辞職した後、国王は、自由統一党穏健派 (国防の友) のメンバーである男爵 Louis De Geer に政権担当を求めた。しかし、De Geer は組閣に失敗してしまつた。

今度は、有名な国際法教授であり、地方長官である Hjalmar Hammar skjöld に大命が降下した。一九一四年二月、彼は四名の保守党员、数名の無党派官僚を中心にして、政党色の希薄な政権を樹立した。スウェーデン銀行の取締であり、指導的な財界人である K. A. Wallenberg が外務大臣に就任した。また、造船・海運業の大立物 Dan Broström が海軍問題相として入閣した。政党色が薄いとはいえ、この内閣は、本質的には、保守主義の内閣であった。不確実性と不安が重く国内にのしかかった。新内閣が取組まねばならない問題は途方もなく困難で重大であった。国際情勢が次第に悪化する中で、この内閣が永年の懸案をうまく解決するだろうと確信している者はあまりいなかった。防衛問題の解決が新内閣の主たる課題であった。もちろん、成立の経緯からして、Gustaf V の基本線に沿

った解決が要求されていた。Hammarström もそれは十分に認識していた。彼は、直ちに、軍事改革プログラムを準備した。(i)徴集兵の訓練期間延長、(ii)装甲巡洋艦の建造、を主たる内容とする防衛法案を提出した。だが、議会は敵意に満ちた取り扱いを受けた。行き詰った内閣は第二院を解散した。議院内閣制の基本原理を逸脱した形で誕生した内閣が「国民の信を問う」という口実で議会解散策に出たのである。

●一九一四年春選挙（第二院）

一九一四年五月選挙では、これまでのスウェーデンでは見られない程激しい刺激的な選挙キャンペーンが展開された。Hammarström の与党ともいえる〈地方居住者および市民党〉は、「先ず何よりも国防を Försvaret främst」というスローガンの下で自由統一党穏健派（国防の友）の一部と共闘した。民族主義、愛国主義、国家主義の感情にアピールしようとした戦術はバルカン半島の情勢を考えると、それなりに成功を収めるように思われた。また、国王の意に背いた Staff 前首相や自由統一党左派を国家への叛逆と非難した。社民党と自由統一党左派は、専ら立憲主義のムードに訴えた。国王が二月にとった行動は憲法の精神を踏みにじるものであると応酬した。両党は、国防費膨張を懸念する大衆の感情にアピールしようとしたが、緊迫した国際情勢が報道されている中では、それだけでは大きな力になりそうになかった。戦争の足音が近くに聞える状況では、憲法精神の擁護、国防費削減というスローガンしかない政党は不利である。その上、同じく大衆組織政党と称していても、社民党に比べて、凝集力がはるかに小さい自由統一党は、さらに一層苦境に立たされることになった。

前例のない程多くの有権者が票を投じた。投票率は七〇パーセントに達し、これまでの最高を記録した。票は右と左に流れた。内閣の支柱である〈地方居住者および市民党〉は六四議席から一六議席回復して、八〇議席になった。

準与党ともいえる自由統一党穏健派(国防の友)は、六議席獲得した。社民党は着実に一〇議席増やして七四議席になった。自由統一党は一〇二議席から七六議席へと大きく後退してしまった。しかもそのうち六議席は反主流派のものであったから、確実に計算できる議席数となると七〇であった。保守は主に Götaland と Svealand で、社民は Norrland で大きく躍進した。この二党の躍進が議会内政党配置図を大きく変えた。唯一の三ヶタ政党が大敗北したために、ほぼ同じ党勢を持つ三つの政党が競合することになった。

保守は議席を増やしたが、依然として過半数からはほど遠かった。 Hammarström が直面しなければならない議会議況は、その意味で、変化しなかったといえよう。この時点では、政府がその防衛法案を実現する可能性はほとんどないように思えた (I. Andersson, 1956)。政府はその成立の経緯からして、軌道修正できない運命にあった。また、Hammarström には Lindman の持ついた強引な政党戦略家としての側面が見当らなかった。彼が大政権を割り、政界再編の核となる可能性は皆無であった (D. Rustow, 1955)。それでは Hammarström がそのまま政権に居座り続け(一九一七年三月まで)ることに成功し、防衛法案も成立させ得た理由は何であろうか。その多くは、第一次世界大戦の勃発(一九一四年八月一日)に求められる。戦争が発生しなかったら、当時の議会状況からいっても、政府の国防法案は第二院で確実に葬り去られていたであろう (S. Carlsson, J. Rosen, 1961)。

選挙後に召集された六月と七月の議会では、単一の政治問題として防衛問題が激しく論じられた。新聞も連日この問題を書き立てた。 Branting が指導する社民党は執拗に政府攻撃を行なった。既に過重になっている防衛費負担が国防強化によって更に一層増大するというのがその論拠であった。一方、選挙で敗北した後、軌道修正の正当な口実を模索していた自由統一党は、次第に態度を軟化させた。戦争の勃発はこの上ない機会を提供した。国際情勢に関す

る党の樂觀的判斷が否定された以上、世論の動向に従わざるを得ない、というのが態度変更の論理であった。党首 Staff は政府の防衛法案を受け入れ、中立政策を支持することに決定した (D. Rustow, 1955, S. Carlsson, J. Rosen, 1961)。この方向転換は Staff の〈愛国的責任感〉の発露と高く評価された。かくして、政府の防衛法案は、微調整の後、第一院では票決なしで、第二院では圧倒的多数で、承認されることになったのである。

●一九一四年通常選挙(第二院)

国防問題が最終段階に達した頃、それと並行して選挙戦が展開されていた。この九月通常選挙でも議会内政党配置図に大きな変化が生じた。

自由統一党は、防衛問題に関する〈愛国的方向転換〉にもかかわらず(それ故にかもしれないが)、一三議席失ない、またしても敗北してしまった(五七議席)。一九一四年に行なわれた二回の選挙で、自由統一党は最大の政党(一〇二議席)から最小の政党へと急降下してしまったのである。労働者階級の指導層の眼には、Staff の〈愛国的方向転換〉も単なる変節としか映らなかつた。自由統一党はここで、労働者階級との堅い絆を失なうことになってしまうのである。また、保守指向の強い数多くの市民や農民もこれを契機に党を見捨てるのである。

前回選挙で第一党に躍り出た〈地方居住者および市民党〉は、既にピークに達していた。現状維持(八六議席)が精一杯であった。僅か一議席差であったが第二党になってしまった。

自由統一党が失なった一三議席はそのまま社民党に移った。社民党は八七議席獲得し、遂に第一党の地位に上昇したのである。これ以後、党は今日に至るまでその地位を一度も失なっていない。

第一次大戦が本格化するまで、憲法問題や社会問題は一時的に棚上げされることになった。スウェーデンは一種の
〈政治休戦 borgfred〉期に入ったのである。
(未完)

《参考文献》

- Andersson, Ingvar, 1956, *A History of Sweden*, New York.
Back, Pär-Erik, 1972, *Det svenska partiväsendet*, Stockholm.
Board, Joseph B., 1970, *The Government and Politics of Sweden*, New York.
Branting Hjalmar, 1927, *Tal och skrifter*, Stockholm.
Carlsson, Sien, Jerker Rosén, 1961, *Svenska historia, del I, II*, Stockholm.
Edenman, Ragnar, 1944, Brantings första riksdag (1897-1902), i *Statsvetenskapliga studier*. Uppsala.
Hallendorff, Carl, Adolf Aschöck, 1970, *History of Sweden*, New York.
Hecksher Gunner, 1951, *Staten och organisationerna*, Stockholm.
Hesslén, G., 1940, *Den svenska parlamentarisomens uppkomst*, Stockholm.
Johansson, Hilding, 1952, *Folkrelserna och det demokratiska samhället*, Karlstad.
Nyman Olle, 1966, *Parlamentarismen i Sverige*, Stockholm.
Oakley, Stewart, 1969, *A Short History of Sweden*, New York.
岡沢憲英, 1971, 「スウェーデン議会政治史研究——序説〈そのⅠ〉」, 『政治学研究』, 第1号。
岡沢憲英, 1972, 「スウェーデン議会政治史研究——序説〈そのⅡ〉」, 『政治学研究』, 第2号。
岡沢憲英, 1976, 「スウェーデンの政治文化——コンセンサス・ポリテイ・システムの社会心理学的分析モデルを求めて」, 『早稲田社会科学研究』, No. 15。
Rustow, Dankwart, 1955, *The Politics of Compromise*, New York.
SDP, 1949, *Berättelse för år 1948*, Stockholm.
Stomberg, Andrew A., 1970, *A History of Sweden*, New York.

Thapper, Fridolf, et al., 1966, *Samhälle och riksdag*, del I, II, III, IV, Uppsala.

Wählstrand, Arne, 1946, *Allmänna valmansförbundets tillkomst*, Uppsala.